

J **apanese text**

2011年 春/夏号 日本語編

アート

文=白坂ゆり

p.118

風景を再生するアート
田窪恭治展 風景芸術

田窪恭治は、特定の現場に滞在して制作し、作家亡き後も生き続けるような風景の芸術を作り出そうとしているアーティストだ。そのため、彼の作品は本来その場所に行かなければ鑑賞することはできない。しかし、今なら東京都現代美術館で、この20年の代表的な二つのプロジェクトを体感することができる。一つは、1989～99年、フランス・ノルマンディー地方に移り住み、廃墟と化していた礼拝堂の修復と林檎の樹をモチーフに壁画を描いた「林檎の礼拝堂」のプロジェクト。もう一つは、2000年から進行中の四国の「琴平山再生プロジェクト」だ。金刀比羅宮から、田窪が椿を描いた襖絵を移設するなど、美術館バージョンとして壮大な「風景芸術」が繰り広げられている。

5月8日まで
東京都現代美術館
東京都江東区三好 4-1-1
www.mot-art-museum.jp

(写真)
《ヤブツバキ》2005年 金刀比羅宮 白書院襖絵 撮影=河村圭一
©2011 Kyoji Takubo

江戸版ブロマイド
特別展「写楽」

寛政6(1794)年、雲母刷りの豪華な役者大首絵28図を出版し、華やかなデビューを飾った写楽。しかし、わずか10カ月の間に140点を超える浮世絵版画を残して姿を消してしまう。1910年、ドイツの浮世絵研究家、ユリウス・クルトによる研究書が発刊されて以来、世界的にその名を知られ

ているが、その生涯は謎に包まれたままだ。この春、東京国立博物館で開かれる写楽展では、写楽の正体探しばかりに心奪われることなく、歌舞伎役者の個性をとらえて単純化、誇張化した表現にいま一度着目する。世界各国から貴重な作品が一堂に集められ、他の絵師による同じ芝居の同じ役を描いた作品との比較も行われる。写楽の独自性が浮き彫りになるだろう。

4月5日～5月15日
東京国立博物館 平成館
東京都台東区上野公園 13-9
http://sharaku2011.jp

(写真)
《三代目大谷鬼次の江戸兵衛》寛政6年(1794年) 大判錦絵 アメリカ・メトロポリタン美術館蔵 ©The Metropolitan Museum of Art / Art Resource, NY

知られざる仏画
特別展「五百羅漢 増上寺秘蔵の仏画 幕末の絵師 狩野一信」

この春、法然上人(1133-1212)没後800年を記念して、増上寺にて秘蔵されてきた仏画《五百羅漢図》が公開される。羅漢とは、釈迦の教えを守り、悟りを開いた者のことで、5人ずつの羅漢が100幅に描かれている。1945年に羅漢堂を戦災で焼失して以来、公開することができなくなっていた、その100幅すべてが展示される。作者は、狩野派の最後の絵師、狩野一信(1816-1863)。一信が96幅まで描いて病没し、残り4幅を妻と弟子とで完成させた。狩野派に入門した一信は、12歳で師を亡くし独学で大成したためか、地獄からの救済図などを、伝統的手法に頼らず奇想天外に描いている。それらがずらりと並ぶ本展は、何よりも見逃せない。

3月15日～5月29日
江戸東京博物館
東京都墨田区横綱 1-4-1

<http://500rakan.exhn.jp/>

(写真)

《五百羅漢図 第 22 幅 六道 地獄》

女性アーティストの現在

クワイエット・アテンションズ 彼女からの出発

社会の変化とともに多様化している、今日の女性アーティストの表現に焦点を当てた展覧会が水戸芸術館で開催中だ。日本、韓国、ブラジル、インドなど9カ国14名の近作・新作を展示。いずれも、身の回りにありながら人々が気づいていないささやかな存在に注意を傾けている。三田村光土里は、旅先などで自ら撮影した写真や映像及び、誰かが撮った写真やアンティークショップで見つけた雑貨などを再構成したインスタレーションで、見る者に物語を想像させる。表現媒体も手法も異なる木村友紀、ユタ・クータ、荒川匡の協働によるインスタレーションも見もの。音や気配、記憶などを媒介に、他者と関係を結ぼうとする、観客に開かれた展覧会だ。

5月8日まで

水戸芸術館 現代美術ギャラリー

茨城県水戸市五軒町 1-6-8

www.arttowermito.or.jp

(写真)

左・三田村光土里《彼女のドレスの紫の花》2008

右・木村友紀+ユタ・クータ+荒川匡《Structure of Fantasy (管理企画のファンタジー)》2010

デザインを通じた絆

「倉俣史朗とエットレ・ソットサス」展
夢見る人が、夢見たデザイン

日本が誇るインテリア・デザイナーの倉俣史朗(1934-1991)

と、20世紀のデザイン界を代表するイタリアの巨匠エットレ・ソットサス(1917-2007)。二人の国や世代を超えた友情は、1981年にソットサスを中心に結成され、倉俣も参加したデザイン・グループ「メンフィス」の活動を通じて育まれた。本展では、倉俣の1981年からの10年間の作品と、ソットサスが晩年に残したドローイングをもとに制作した世界初公開作品を紹介する。工業化が進み均質化していく社会に対し、機能性や利便性にも増して、デザインを通じて生活に喜びをもたらそうとした二人の夢を今こそ見直したい。

5月8日まで

21_21 DESIGN SIGHT

東京都港区赤坂 9-7-6

<http://www.2121designsight.jp>

(写真)

上・倉俣史朗《ラピュタ》1991年 ベッド Photo by Kishin
Shinoyama

下・エットレ・ソットサス《カチナ》2007年 Photo / Erik & Petra
Hesmerg -Amsterdam, The Gallery Mourmans-Lanaken

光琳の二つの金屏風が再会

KORIN 展 国宝「燕子花図」とメトロポリタン美術館所蔵「八橋図」

蒐集家で実業家、故・根津嘉一郎のコレクションに始まる約7,000件の東洋古美術を保存・展示する根津美術館。開館70周年を記念し、江戸時代の絵師・尾形光琳が描いた金地屏風の夢の共演が実現する。根津美術館が所蔵する国宝《燕子花図》と、メトロポリタン美術館が所蔵する光琳筆の《八橋図屏風》が、約100年ぶりに一緒に展示されるのだ。《燕子花図》は、『伊勢物語』に登場する燕子花の名所「八橋」で詠まれた和歌をもとに、鮮やかな群青と緑青で燕子花の群生が描かれたもの。《八橋図屏風》は、その十数年後に橋のモチーフを加えて再構築された。この機会に二つの名作を見比べてみよう。

4月16日～5月15日
根津美術館
東京都港区南青山6-5-1
www.nezu-muse.or.jp

(写真)

上・国宝《燕子花図屏風》六曲一双 江戸時代 18世紀 根津美術館蔵
下・《八橋図屏風》六曲一双 江戸時代 18世紀 メトロポリタン美術館蔵 ©The Metropolitan Museum of Art

建築と美術

青森県立美術館開館5周年記念展 青木淳×杉戸洋展 はっばとはらっぱ

2010年12月の東北新幹線全線開通により、アクセスが楽になった青森県立美術館。隣接する三内丸山縄文遺跡の発掘現場から着想された、青木淳設計による建物は、白く塗装した煉瓦の量塊と切り込まれた地面とを凸凹に噛み合わせるという工法により、ホワイトキューブと土の壁や床がコントラストをなしている。開館5周年を迎え、青木淳と画家の杉戸洋が、使い方次第でさらなる可能性を秘めたこの建築の魅力を十分に引き出し、作品と建築が融合する展覧会を試みる。実現されなかった建築案を具現化したり、普段は入れないバックスペースや屋外も使って新作絵画や立体を展示したり。美術館全体を冒険してみよう。

4月23日～6月12日
青森県立美術館
青森市安田字近野185
http://aokixsugito.com

(写真)

上・青木淳 青森県立美術館 2006年 ©阿野太一
下・杉戸洋《pink Continental》2008年 ©Hiroshi Sugito

21世紀型都市の提案

Tokyo Metabolizing (仮題)

第12回ヴェネツィア・ビエンナーレ建築展帰国展

2010年に行われた「第12回ヴェネツィア・ビエンナーレ建築展」。昨年のプリツカー賞受賞者、妹島和世による総合ディレクションはもとより建築家の北山恒がコミッショナーを務めた日本館での展示もまた、未来の建築を予見するものとなった。その日本館の展示帰国展が開催される。1960年に日本から世界に発信された「メタボリズム」は、都市を機械のように、機能部品の置き換えにより新陳代謝させるといった提案であった。現在この概念は、一つ一つの建物が個別に建て替わって変化しながら、街全体でそれをおおらかに許容するといった新しい世代の建築／都市観に形を変えて実践されているといえる。アトリエ・ワン(塚本由晴/貝島桃代)、西沢立衛、北山による実物の2分の1サイズの住宅作品を通じて東京の現在を検証する。

7月16日～10月2日
東京オペラシティアートギャラリー
東京都新宿区西新宿3-20-2
www.operacity.jp/ag

(写真)

第12回ヴェネツィア・ビエンナーレ建築展 日本館展示風景
Photo by Andrea Sarti/CAST1466 Courtesy of 国際交流基金

エンタテインメント

文=工藤素太郎、白坂ゆり、松丸亜希子

p.120

伝説の女性、ミツコ
 ミュージカル「MITSUKO」～愛は国境を越えて～

20世紀初頭のウィーンに、社交界の花形と呼ばれた日本人女性がいた。ミツコ・クーデンホーフ・カレルギー。彼女の生涯を描いたミュージカルが日本で上演される。1874年に生まれた商家の娘ミツは17歳でオーストリアの外交官ハインリッヒ・クーデンホーフ・カレルギー伯爵と結婚。ローマ法王やオーストリア皇帝とも謁見する。物語は、夫亡き後のミツコの孤独と、次男リヒャルト(パン・ヨーロッパ思想の提唱者)との対立と和解を軸に進んでいく。2005年にウィーンで上演されたコンサート版を原型に、脚本・作詞・演出の小池修一郎、作曲のフランク・ワイルドホーン(「ジキル&ハイド」「スカーレット・ピンパーネル」)が、ミュージカルとして完成させたもの。世界初演で海外での上演も見据える。—S.K.

5月15日～23日

■梅田芸術劇場 大阪市北区茶屋町 19-1

5月27日～29日

■中日劇場 名古屋市中区栄 4-1-1 中日ビル9階

6月11日～29日

■青山劇場 東京都渋谷区神宮前 5-53-1

<http://mitsuko2011.com/>

(写真)

左・ミツ(安蘭けい)

右下・左:ミツ(安蘭けい)、右:ハインリッヒ(マテ・カマラス)

撮影=村尾昌美

何でもこなす便利屋2人組
 まほろ駅前多田便利軒

2006年に直木賞を受賞し、累計40万部を超えた三浦しをんの人気小説を、「ケンタとジュンとカヨちゃんの国」の大森立嗣監督が映画化。日本映画に欠かせない瑛太と松田龍平が、東京郊外の街で便利屋を営みながら地域の人々に関わり合い、仕事を越えて響き合う青年たちを演じる。彼らがまとうミステリアスな雰囲気、謎めいた過去を持つ人物像にリアリティを与える。脇を固めるのは、監督の父・磨赤兒、弟・大森南朋をはじめ、実力と個性を持つ役者陣。季節を追いかけるように物語が進行するが、初夏の爽やかな風が吹き抜ける時期に観るのにぴったりの作品だ。—A.M.

4月23日より、新宿ピカデリー、有楽町スバル座ほか全国で公開

<http://mahoro.asmik-ace.co.jp/>

(写真)

©2011「まほろ駅前多田便利軒」製作委員会

国際的に活躍するフラメンコギタリスト
 沖仁 SPRING TOUR 2011 ~Con Palmas~

セラニート、ハビエル・コンデ、クレモンティーヌ、葉加瀬太郎、Saigenji、cobaなど、国内外の多彩なアーティストと共演。正統派でありながら、ジャンルを軽やかに超えて活躍するフラメンコギタリスト沖仁が、国内4カ所のライブツアーを行う。NHK大河ドラマ「風林火山」の紀行テーマ曲の提供、FUJI ROCK FESTIVAL出演、南米ツアー、スペインやイタリアでの公演など活動は多岐に亘り、2010年7月には、スペインの3大ギターコンクールのひとつ、権威ある「ムルシア『ニーニョ・リカルド』フラメンコギター国際コンクール」国際部門で、日本人初の優勝という快挙を達成。ますます注目が集まっている。—A.M.

3月4日

名古屋ブルーノート 名古屋市中区錦3-22-20 ダイテックサカエビルB2

3月10日

ビルボードライブ大阪 大阪市北区梅田2-2-22 ハービスPLAZA ENT B2

3月19日

モーション・ブルー・ヨコハマ 横浜市中区新港1-1-2 横浜赤レンガ倉庫
2号館3階

3月21日

ブルーノート東京 東京都港区南青山6-3-16 ライカビル

(写真)

© 大木大輔

ビジュアル・パフォーマンス

梅田宏明

「Holistic Strata (ホリスティック・ストラータ)」

舞台の映像やサウンドも自ら制作し、パソコンを携え、身一つで世界の主要な劇場やフェスティバルを飛び回っている、振付家、ダンサー、ビジュアルアーティストの梅田宏明。1977年に東京で生まれ、20歳でダンスを始めた注目アーティストだ。光や音の粒子に溶け出すような身体。彼の作り出す舞台では、身体も舞台上の要素の一つであり、照明や音響はダンスを見せるための従属的なものではなく、光、音、身体のすべてが等価となる。山口情報芸術センターで滞在制作し2月に公演した新作「Holistic Strata」のインスタレーションを東京で発表。梅田が選んだダンサーによるパフォーマンス公演もある。3月末のヨーロッパツアーの前にぜひチェックを。—Y.S.

3月4日～13日

■森下スタジオ

東京都江東区森下 3-5-6 <http://precog-jp.net>

(写真)

《Holistic Strata》

提供=山口情報芸術センター [YCAM]

帝劇百年 帝国劇場の100周年

東京の皇居前にある帝国劇場は1911年3月1日に開場。今年で100周年を迎える。当時の政財界有力者の尽力により開場した日本初のヨーロッパ式演劇劇場で、オペラやシェイクスピア作品、歌舞伎も上演された。震災と老朽化で2度の建替えが行われたが、今も「帝劇」の略称は日本の演劇ファンに親しまれ、この劇場で上演される作品に出演することは日本の演劇における一流の証ともいえる。近年は、日本の演劇界のミュージカル人気を反映して、海外のヒット作、オリジナルのミュージカル作品の上演が多い。100周年記念で選ばれた2011年の主な公演予定作品も、帝劇の歴史にその名を刻んできた「レ・ミゼラブル」「風と共に去りぬ」、そして日本初上演の「三銃士」などミュージカルが中心。—S.K.

■帝国劇場

東京都千代田区丸の内 3-1-1 www.toho.co.jp/stage

「レ・ミゼラブル」4月12日～6月12日

「風と共に去りぬ」6月18日～7月10日

「三銃士」7月17日～8月26日

(写真)

左・1911年3月、オープン当時の帝劇 © 東宝演劇部

右下・「レ・ミゼラブル」前回公演より © 東宝演劇部

日本発の新しい音楽の波 ソノダバンド

J-Popともアニメソングとも違う、日本発の新しい音楽が飛躍しようとしている。20代半ばの男たちによるヴァイオリン、チェロ、キーボード、ギター、ベース、ドラムの6人編成のインストルメンタル・バンド、ソノダバンド。ヴォーカルはないが、演奏から歌が聴こえると評価される。結成は2006年。ライブやインディーズCD発売などを経て、2010

年3月にテキサス州オースティンで開かれた音楽イベント「SXSW」で大喝采を受け、10月にメジャーデビュー。3月からアルバムタイトルを冠したライブツアー「Renaissance II」をスタートする、いま日の出の勢いがあるバンドである。—S.K.

3月2日、「フェルメール《地理学者》とオランダ・フランドル絵画展」(3月3日～5月22日、Bunkamuraザ・ミュージアム)公式テーマ曲「光、透明、または情熱」のCDを発売 3月18日 SXSW 2011 (Elephant Room) ほかアメリカ国内数カ所で開催予定

問い合わせ先: inform@sonodaband.jp 「Renaissance II」ツアー

- 4月22日 名古屋 e11 SIZE
 - 4月23日 高松オリーブホール
 - 4月27日 札幌 KRAPS HALL
 - 4月29日 神戸 Chicken George
 - 4月30日 大阪なんば Hatch
 - 5月13日 米沢市民文化会館
 - 5月15日 仙台市民会館
 - 5月31日 東京国際フォーラム ホールC
- www.sonodaband.jp

(写真)

©Thirdnote company

北海道の光と闇 海炭市叙景

5度も芥川賞にノミネートされながら、1990年に41歳で自ら命を絶った北海道函館市出身の小説家、佐藤泰志。未完の遺作となった連作短編小説を映画にしたいと望む市民の呼び掛けで、帯広市出身の気鋭の監督、熊切和嘉がメガホンを取った。18編から選んだ5編のエピソードをからめ、地方都市で懸命に生きる人々の姿を温かなまなざしで描き出す。市民主導による製作委員会が募金で1200万円を集め、プロの俳優に交じって市民がキャストとして参加するなど、函館市民参加で架空の「海炭市」を作り上げたことも

話題に。ジム・オルークの抑制された音楽、観光地とは異なる街の表情をダイナミックに映す近藤龍人のカメラワークも秀逸だ。—A.M.

日本全国の劇場で上映中 www.kaitanshi.com

3月9日～13日 第13回ドーヴィル・アジア映画祭で上映

4月27日～5月1日 第11回ニッポン・コネクション(フランクフルト)で上映

4月28日～5月6日 第12回チョンジウ国際映画祭で上映

(写真)

©2010 佐藤泰志 / 「海炭市叙景」製作委員会

桜と音楽の競演

東京・春・音楽祭—東京のオペラの森2011—

江戸時代から続く桜の名所、上野公園。上野は音楽や美術の中心地でもあり、東京文化会館、東京国立博物館、国立西洋美術館など、公園を囲む文化施設を会場に音楽祭が開催される。7年目となる今年は、豊かな音楽性で欧米の楽壇で注目を集める32歳の指揮者アンドリス・ネルソンスが、前回からスタートしたNHK交響楽団とのワーグナー・シリーズに初登場し、オペラ「ローエングリン」を指揮するほか、美術展に合わせた「レンブラント 光の探求／闇の誘惑」記念コンサート、東京オペラシンガーズによる懐かしい日本の歌の合唱、大活躍の高校生フルーティスト・新村理々愛のリサイタル、アルゼンチン・タンゴの夕べなど、約60公演を予定。—A.M.

3月18日～4月10日

■上野恩賜公園

東京都台東区上野公園・池之端3丁目 www.tokyo-harusai.com

(写真)

左・アンドリス・ネルソンス ©Marco Borggreve

右下・◎青柳聡